

## 4. 「ディスクレパンシーとは」

東京歯科大学小児歯科学講座教授

町 田 幸 雄

ディスクレパンシーには、不一致とか食い違いなどの意味があり、歯科的には顎の大きさと歯牙の大きさの不調和という意味で使用されている。この意味からすれば、一つは顎の大きさに対し歯牙が大きいか、あるいは歯牙に対して顎が小さすぎるために歯牙の排列の場が不足し、一般的には歯列の叢生や歯牙の埋伏を生ずる。もう一つは、顎の大きさが歯牙に対し大きいか、あるいは顎に対し歯牙が小さすぎる場合に生じ、一般的には空隙歯列として現れる。しかし、現在ディスクレパンシーというと多くの場合不正咬合の治療に当たって、歯牙を抜去するかどうかを判定するときに用いられている。近年、ディスクレパンシーは、不正咬合の原因として取り上げられ、我が国の不正咬合の多くがこれに起因していると主張する学者もいる。しかもディスクレパンシーに起因する不正咬合は我が国においてここ20～30年間に急増しているとし、その原因が小児の食生活の変化による顎の矮小化にあると指摘している。確かにディスクレパンシーによる不正咬合が存在することを否定はしないが、ディスクレパンシーの大きな兆候と考えられている叢生は必ずしもディスクレパンシーだけによるものではない。叢生は遺伝的、機能的、歯牙の早期喪失などの原因によっても生ずる。事実、空隙歯列においても歯牙の捻転している症例も存在するし、空隙不足を解消するために歯牙を抜去して矯正した症例でも前歯部の叢生は前と同じ形に後戻りする症例が多い。

我々は、乳歯の早期喪失を来すことなく、永久歯列に移行した77例について観察したところ、不正咬合の発現率は、51.9%であった。しかし、不正咬合中、空隙歯列に移行した症例が11.7%も認められた。このように低い発現率は乳歯の早期喪失による不正咬合の発生が予防されていたためと考える。従って、ディスクレパンシーによる不正咬合と診断するに当たっては特に慎重に行わなければならないと考える。